

社団法人私立大学情報教育協会
平成 21 年度 社第 1 回 CCC 体育学グループ運営委員会 議事概要

- I. 日 時： 平成 21 年 5 月 15 日（金） 午後 5 時から午後 7 時まで
II. 場 所： 私情協事務局会議室
III. 出席者： 鈴木委員、手塚委員、田附委員
井端事務局長、事務局山野上
IV. 検討事項：

1. 学士課程教育の動向と今後の進め方について

事務局より、学士課程教育と質保証のあり方の検討について

本年度の委員会では、昨秋検討した学士力案を今後さらに詳細化し、コアカリキュラムのイメージや測定評価を加えて本年度の最終報告を作成したい。情報教育のモデルについては、次年度以降の課題となるが、そのためにはまず、教員の教育力について検討をする必要がある。最終的には大学のガバナンスにまで踏み込めるとよい。委員で検討した内容についてはサイバーFD 教員へ意見を伺ったり、委員を増やしてより幅広い意見が集約する必要がある。

2. 体育学教育について意見交換

体育学教育について委員間でフリーディスカッションを行った。

- ・ 国際大会で優秀な成績を修めたら学び直しをさせて指導者として活躍できるような仕組みがあるとよい。
- ・ 体育会系学生は、コミュニケーション能力や人間力に優れ、企業が採用を望んでいる実態がある。体育会系学生の専用の就職サイトがある。
- ・ 健康管理は社会保険の問題と関連して重要な問題であり、間接的に社会に貢献する。

3. 体育学学士力の詳細について

① 学士課程教育の共通認識について

これまでに策定した 4 つの学士力について、更なる詳細化を検討するにあたり、先ず意識共有のディスカッションを行った。内容は以下の通りであった。

- ・ 学士力とは誰に対するアピールなのか、社会や企業が求める理想像なのか、学生に対して求めるべき学力なのか。それに対して、中教審答申では、「21 世紀型市民」として必要な素養としか触れていない。
- ・ グローバル化や少子化、大学全入時代等の問題を解決するために、問題提起がなされてきた経緯がある。個人の幸福と国・社会の発展に貢献する人材を育成するという広い意味で 21 世紀型市民を捉えるのがよい。学生が社会に出て自立して問題解決できるようになるための基礎を大学教育で培うことが望まれる。
- ・ 学習の動機づけ、双方向型の学習、体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れる必要がある。
- ・ イギリスの全大学は外部試験管制度をとっている。口頭試問を行うことで、どの大学の学位で

も均質であるが、日本では学生数も多く実施するのは難しい。複数の大学教員から口頭試問の内容を共有しアーカイブ化するなど、暗記学習によらない学習を促し評価することが求められてくる。

② 学士課程教育の詳細化について

下記の項目について詳細内容について検討を行った。

a. 「身体運動を通して、健康の維持増進の重要性を学術的に理解できる。」

客観的なデータ評価や他人の健康状態が良くなったという観察、自分の健康が良くなっているという主観的感覚を養うことが重要であることから、次の通り詳細内容を決定した。

- ・ 身体運動の効果を数値的（筋力、心肺機能、平衡性、体脂肪率、骨密度等）に把握し、変化を自己評価できる。
- ・ 身体運動の効果を体感できる。
- ・ 他者の身体運動の効果を観察できる。

b. 「身体を動かす喜びを実感し、個人および社会の生活の質の向上に役立てることができる。」

健康に関する関心と呼び起こし、健康維持が社会的に貢献するということを主眼に次のように内容を決定した。

- ・ 身体運動の効果を体感することにより心身ともに充実したライフスタイルを送ることができる。
- ・ 集中力が高まって持続できる。
- ・ 日常生活で事故を未然に防ぐことができる。
- ・ 免疫・抵抗力が向上して疾病にかかりにくくなる。
- ・ 健康の増進維持に関する自己管理が確立し、医療費の削減等、社会的な負担の軽減に貢献できる。
- ・ 生産性の向上に貢献できる。

4. 今後の進め方

学士力の詳細については引き続き検討を行うこととなった。次回委員会は7月23日(木)午後5時より開催することとなった。